

スペシャルワードってどうですか —対話のずれについての考察—

及川一郎（哲学カフェ・哲学対話ガイド&ヨコハマタイワ）

1. あらすじ

哲学対話の場では、使われる言葉の理解の違いにより、参加者の間で誤解が生じ、話が噛み合わなくなり、対話にずれが生じることがあります。

ただし、どんな言葉でも誤解が生じるのではなく、言葉によって誤解の生じやすさには違いがあり、特に、ある人が特別な思いを込めて使う言葉は誤解を招きやすいように思えます。

この文章を通じて僕は、そんな特別な思いが込められた言葉たちをスペシャルワードと呼ぶことを提案します。そして、誤解を招きやすい言葉だから進行役としては避ける必要もあるけれど、一方で、特別な思いが込められた言葉だからこそ大事にしたいこともある。これを両立するためにはどうしたらいいのだろうか、というようなことを考えてみることにします。

スペシャルワードというのが流行語になって、対話に役立つらしいなあ。

2. スペシャルワードとは

先日、哲学カフェで進行役をしていて、特定の言葉が対話のずれを招くことがあると気づいた。

その日のテーマであった「人生」について話さ中で、ある参加者が「人生はあきらめも大事だよ。」というような話をした。僕はそのとき、彼女は人生を否定的に捉えているのかな、と思った。多分、多くの参加者がそう思っただろう。しかし、話の続きを聞いてみても、どうも彼女の話はネガティブな方向に進んでいかない。そのまま対話が続き、僕の中の違和感が高まったところで、ついに意図を確認したところ、彼女は、「あ

きらめ」ということを否定的には捉えていない、と言った。どうも「あきらめ」という言葉を「自由」の文脈で捉えていて、過去の自分自身からの解放といったような意味で使っていたようなのだ。なんだ、そういうことか、と僕は思った。それなら、これまで彼女が言っていたこともよくわかる。やっと腑に落ちた。もし確認しなかったら、無意識に感じていたずれが心に残り、なんとなくモヤモヤしたままだっただろう。

また、別の参加者が、その「自由」という語について、孤独という感覚を読み込んでしまう、と言っていた。どういうことか聞いてみると、「自由ということは、他の人からの干渉がなく自分だけで対応しなければならないということだから、そこに孤独を感じる。」ということだった。その発言があるまで、かなりの時間、自由という言葉ポジティブなものとして使って対話を続けていた。きっと、彼女（この回は女性が多かったのです）は、ずっと違和感を抱えつつ、話の輪に入っていたのだろう。

あの日の哲学カフェでは、「あきらめ」や「自由」という言葉は特別な役割を果たしていた。これらの言葉がきっかけとなり、認識にずれが生じ、参加者は同じ言葉を交わしながら、違う理解をするようになっていったのだ。対話にずれが生じたと言ってもよいだろう。このような特別な働きをする言葉を、僕はスペシャルワードと呼びたい。

3. スペシャルワードみたいな言葉

ただ、その日、進行役の僕はスペシャルワードという言葉は使わなかった。その場の思い付きで「それってマジックワードだね。人によって理解にずれがある言葉みたいだから使い方に気を付けてみようか。」というように仕切った。そのとき僕は、「あきらめ」や「自由」といった誤解が生じそうな言葉は、気を付けて、避けて、別な言葉で言い換えるべきと思ったのだ。その気持ちがマジックワードというトッサのネーミングにも表れている。僕は、マジックワードというと「欧米ではこれが当たり前だよ。」とか「こうすればみんな喜ぶんだから。」といった、相

論考の扉

手をなんとなく納得させて自分の主張をうまく通す表現というような印象を持っている。そのときは深く考えなかったけれど「あきらめ」や「自由」といった言葉についても、一つの言葉にいろいろな意味を詰め込んで、相手をわかったような気にさせて、うまく話を進めるものという印象がどこかであったのだろう。うまく話を進める魔法の言葉だからマジックワードと思ったのだ。あえて言えば、魔法みたいなずるい言葉という感じだろうか。

また、後日ネットで調べてみると、ほかに「ビッグワード」という表現もあるようだ。クリティカルシンキング業界で使われている言葉のようで、「抽象的で大きい意味を持つ言葉、つまりビッグワードは、相手に誤解を生じさせる可能性があるから気をつけましょう。」という文脈で使われるようだ。さきほどの「自由」なんていうのは、まさに大きな言葉で、ビッグワードの代表例と言ってよいだろう。こういう大きな言葉は、注意が必要な、お尋ね者の言葉なのだ。

4. スペシャルワードの評価

僕はここで、否定的な意味を含むマジックワードやビッグワードではなく、スペシャルワードという言葉を提案する。ネットで調べる限り、スペシャルワードという言葉はあまり使われておらず、そこには肯定的な意味も、否定的な意味も込められていない。色が付いていない言葉だ。そんな言葉がふさわしいと今になってみると思うのだ。

なぜなら、先日の哲学カフェの場ではとっさに否定的に扱ってしまったけど、よく考えてみると、あの日の「あきらめ」や「自由」といった言葉たちは、僕の第一印象とは異なり、避けるべき、ネガティブな側面ばかりではない。なぜ彼女たちが、あえてこれらの言葉を使ったのかと言えば、それが大事で特別な言葉だからに違いない。大事だから、その言葉を選んだのだ。多分、彼女たちは、普段から「あきらめ」や「自由」といった言葉を使って世界を捉え、解釈して生きているのだろう。もしかしたら、「人生はあきらめが大事」なんていうのを座右の銘にしている

のかもしれない。これらの言葉に色々な意味が込められているのは、魔法をかけて誰かをごまかすためではなく、ただ、その言葉を使ってこれまで色々と考えてきたからなのだ。そんな大事で特別な言葉は、そう簡単に否定的に扱ってはならない。これまでの生き様が現れた貴重な言葉なのだ。

自分自身を振り返ってみても、何かを考えるときには、たいてい、特定の言葉をテコのようにして考えを進めていたように思う。例えば失恋して落ち込んだとき、「僕はあの人のことを本当に大切に思っていただろうか。」なんて思い悩んだ。このとき、「大切」という言葉を重要視して、二人の恋愛を振り返っていたのは明らかだろう。そして「あのときの、あの行動は相手ではなく自分のことを大切に思っただけだったのでないか。」などと落ち込んだ。これは「大切」をスペシャルワードとして考えを進めていたということだろう。

5. 哲学と哲学対話におけるスペシャルワード

考えてみれば、いわゆる哲学業界はスペシャルワードにあふれている。ぱっと思いつくだけでも、プラトンならアイデア、西田幾多郎なら絶対矛盾的自己同一、永井均なら＜私＞というように。哲学とは、スペシャルワードを発明し、そしてそれをうまく説明しようとする営みのことではないかと思えるほどだ。(哲学におけるスペシャルワードについては、最後におまけとして少し論じています。)

哲学対話においてもスペシャルワードは重要な役割を果たす。哲学カフェでのテーマの多くは、スペシャルワードとなりそうな言葉を選んで設定されていると言ってよいだろう。先日の僕の哲学カフェでの「人生」というテーマなんてその典型例だ。「人生」という言葉が多くの人にとって色々な意味を読み込むことのできるスペシャルワードだからこそ、話が面白くなるのだ。

哲学対話とは、スペシャルワード特有のずれを参加者の間で丁寧に解きほぐしていくことだというのは言い過ぎだろうか。それが対話のすべ

論考の扉

てではないにしても、かなりの部分を占めているのは確かではないだろうか。

それはともかく、哲学対話にずれを生じさせつつも、重要な役割を果たす特別な言葉のことを、祭り上げるのではなく、かといってマジックワードやビッグワードと揶揄するのでもなく、中立的にスペシャルワードと呼ぶのは、適切な取り扱いであると僕は考える。

6. スペシャルワードの取り扱い

それでは、そんなスペシャルワードを、哲学カフェの進行役として、どのように扱えばよいのだろうか。

まず、全く哲学的な考察ではなく、哲学カフェの進行役としての経験から言っておきたいが、ある程度うまくいっている対話でこそ、スペシャルワードが問題となるという実感がある。対話がうまく流れ、話の焦点が絞れてきて、参加者の言葉の使い方の細かいところにまで注意が向くようになっているからこそ、そこにあるずれが気になってくるのだ。

世の哲学対話の場が、いつでも、どこでもスペシャルワードを問題とできるほどうまく回っているとは思えない。うまくいっている哲学カフェでも、参加者が疲れて集中力がなくなってきたときなどに、エアポケットのように対話が失われる瞬間がある。こんなときに対話のずれを意識するほど精緻な対話はできない。また、僕は参加したことがないけれど、学校の授業で強制的に哲学対話に参加させられた場合などは、任意の参加者ばかりの哲学カフェよりも厳しい状況があるだろう。スペシャルワードが問題となるのは、対話に慣れ、ノッて、楽しんでいる状況においてであり、対話がうまくいっている証なのだ。

そのうえでスペシャルワードの実際の扱い方を考えたいが、大前提として強調したいのが、スペシャルワードを強く抑制し、参加者が自分自身の特別な思いを発言しにくくなってしまいうようなことは避けるべきということだ。参加者が萎縮してしまったら元も子もない。

一方で、過度なスペシャルワードの使用は混乱を招くのも確かだ。

あるスペシャルワードが登場し、整理がつかないうちに、次々とスペシャルワードが使われてしまったら、何の話をしているのか、よくわからなくなってしまうかもしれない。そんなときは、少し対話の手綱を引き、ひとつひとつスペシャルワードに向き合い、個別撃破していったほうがいいだろう。それはつまり、時々立ち止まり、時には戻り、じっくり対話していくということでもある。

また、現実的には、扱うスペシャルワードの総量を抑制することが必要になるときもあるだろう。多分、対話の時間が無限にあるなら、いくらでもスペシャルワードに向き合ってもよいのだろう。しかし、2時間かせいぜい3時間という哲学カフェの時間制限を考えると、それは不可能だ。特に根拠はなく、僕の経験則に過ぎないが、一回の哲学カフェで混乱なく扱えるのは、哲学カフェのテーマとして用いているだろうスペシャルワードに加えて、あと2、3個がせいぜいなのではないだろうか。

哲学カフェでの適切なスペシャルワードの数はともかくとして、時として、「それはスペシャルワードだから、今のところ、そこには踏み込まないようにしよう。」と明確に仕切ったり、新たな道になんとなく踏み込まないようにしたり、といった配慮が必要になるのは確かだろう。

(哲学カフェで偉い人の言葉を使わないというルールが設定されるひとつの理由は、偉い人の言葉がスペシャルワードになりがちだということにあると思う。)

7. 喜び、楽しみ、表現すること

しかし、それでも思うのだけど、やはり哲学対話に整理や抑制なんて似合わない。僕は進行役として結構介入し、整理したり抑制したりするほうなのだけど、そんなとき本来やるべきでないことをやっているような気分になる。哲学対話の大事な部分を損なっている気がして、申し訳ないなあ、と思いつつやっている。

そこで重要なのは、楽しみ喜ぶという気持ちだと思う。哲学カフェを進行していて、誰かがスペシャルワードを発したなら、まずその展開を

論考の扉

進行役自身が楽しみ、対話の場が盛り上がっていることに喜ぶのだ。

それは何も、無理して楽しんでいるように見せるということではなく、哲学対話の本質的な醍醐味をただ味わうということであり、いわば素直に一人の参加者として楽しむということだ。誰かが特別な言葉に乗せて大切な思いを語ってくれるという展開をワクワクして楽しみ、そんな発言をしてくれたことを喜ぶということだ。そして、進行役として率先して、その楽しみや喜びを表現し、参加者と共有するのだ。まずは、対話の場が楽しさや喜びに満ちた場であることを確認することが最も重要で、そのうえで、整理したり抑制したり、ということは進行役の好みでやればいい。

そうすれば、その整理や抑制が少々対話を損なうことになっても、きっと哲学対話の場に敬意を表したことにはなる。また、整理や抑制が少々うまくいかなかったとしても、楽しみや喜びに満ちた場の雰囲気があることはチャラにしてくれるだろう。

(なお、「対話の楽しさや喜び」という言葉は、僕にとってのスペシャルワードなのだろう。そこに色々な意味を込めている。ここでは、笑いが生じるような楽しさだけではなく、話題が辛いもので、沈痛な雰囲気に含まれていても、その話をする事自体は楽しい、というような側面も含んだものとして使っている。)

話の流れを整理したり、必要に応じて抑制したりするのは、確かに進行役の重要な役割だ。そのためには、僕がここで提案したスペシャルワードという観点が役に立つのではないかと思っている。

しかし、進行役にとって、もっと大切なのは、まず、自ら哲学対話の楽しさや、楽しみを味わえることの喜びを素直に表現することだ。それが、初めての参加者に哲学対話の魅力の具体例を示すことにつながり、また、ここは楽しんでよい場だということを伝え、安心して楽しんでもらうことにつながる。既に対話の魅力を知っている人には、もっとノッて楽しんでもらうための導火線となる。そして、そんな参加者の楽しさ

が進行役の喜びとして返ってきて、進行役は更に楽しさを表現していくこととなる。こうして正の循環に満ちた場が成立する。

その第一歩として、進行役が、まず、誰よりも哲学対話を楽しみ、それを表現することが大切なのだ。

これこそが哲学対話の進行役の役割であり、もし、フィロソフィー（知を愛すること）に導き手というものがあれるのなら、その人に求められるものなのではないだろうか。

以上、対話がずれても、進行役が、哲学対話の楽しささえ忘れなければ、たいていのことはなんとかなります、という話でした。

8. おまけ 哲学におけるスペシャルワード

ここまでで当初想定していた話は終わりますが、もう少し書けそうなので、おまけで、哲学でのスペシャルワードには、ここまで触れなかった特別な側面があるということを書いておきます。

ここまで、スペシャルワードについて、哲学対話のうち、主に対話の観点から述べてきたが、哲学の観点から、もう少し話すことがある。

さきほど、例えばアイデアというような哲学用語もスペシャルワードであり、哲学において重要な役割を果たしているという話をした。

スペシャルワードには、僕がマジックワードやビッグワードと呼びたくなったような、負の側面があるが、それは哲学においても同様だ。

僕は、学問としてのいわゆる哲学とは、哲学対話の見本のように議論を進めるべきものだと思っている。読者に誤解が生じないように丁寧に説明し、読者からありえる反論を想定して議論を進める、といったようなかたちで。しかし、大学で専門の哲学的なトレーニングを受けていない僕の間からは、多くの哲学書はそうならないように思える。ある種の哲学書は、学術的に小難しい用語を並べて、読者をなんとなくわかったような気にさせてごまかして話を進めているようにしか思えない。

論考の扉

これは、明らかにスペシャルワードの負の側面ではないか。そこまで極端でなくても、世の哲学書は、スペシャルワードを極力使わず、もっと誤解を招かないような丁寧な説明ができないものだろうかと思う。

しかし、それは出来ない相談なのだろう。哲学はいわば言語の限界に迫ろうとする試みだと言ってもよい。(そうでない哲学もあるかもしれないが、僕にとっての哲学である形而上学に限れば、まさにそのようなものだと思う。)言語の限界に迫り、通常使えるような言葉が尽き、それでも更に一步、議論を進めようとするとき、少々無理をするのは仕方ないことなのだ。そして、そのときの無理がスペシャルワードというかたちで現れるのだ。限界に迫ったときの、あえて、もう一步の勇み足こそが、哲学におけるスペシャルワードの役割だと言ってもよい。その勇み足があるからこそ、議論を先に進めることができる。だから哲学において本当に必要なスペシャルワードは難解なのだ。

哲学書においてスペシャルワードが登場したなら、それは、その議論の頂点にたどり着きつつあるという証だ。そのようなときは、哲学カフェで盛り上がったときと同じように、読者が筆者に寄り添い、じっくり、ゆっくりと筆者の言葉に向き合わなければならない。力を振り絞ってぎりぎりの一步を踏み出そうとする筆者のことを、読者は最大限の力で支えなければならない。なぜなら、哲学書を理解するとは、哲学対話と同じように筆者と読者の共同作業なのだから。これが、哲学におけるスペシャルワードについて、僕が言いたかったことだ。

なお、ここでは言語の限界に迫るというスペシャルワードの役割について哲学特有のものとしたが、実は哲学対話でも大差ないようにも思える。

その理由を端的に言えば、哲学カフェにおけるスペシャルワードは、十分に、いわゆる哲学においてもスペシャルワードとなりうるからだ。この文章で哲学カフェにおけるスペシャルワードの例とした「あきらめ」「自由」「人生」という言葉たちなんてまさにそうだ。

「あきらめ」を例に考えてみよう。先日の哲学カフェで、「あきらめ」については、(達成困難な目標などの) なにかに近づかず、避けてやりすごす、というような通常の否定的な意味と、(過去のしがらみなどの) なにかを自分から切り離し、そこから自由になる、というような肯定的な意味とがあることが明らかになった。この二つの意味には肯定と否定という正反対の方向性と、自分と何かとの間で距離をとるといような意味合いでの共通性があると言ってよいだろう。

さて、では、ひとつの「あきらめ」という語に二つの側面があるとはどういうことなのなのだろうか。それは一つなのだろうか、二つなのだろうか。一つとすれば、二つの意味を持つことが説明できないし、二つとすれば、一つの言葉で表現できることが説明できない。これは、(少なくとも「あきらめ」という言葉に特別な思い入れがある人にとっては) まさに言語の限界に近づきつつある哲学上の難問だと僕は思う。

本筋から外れるので、これ以上は掘り下げないが、「あきらめ」が哲学カフェだけでなく、いわゆる哲学においてもスペシャルワードとなりうるものが、なんとなく伝わったのではないだろうか。「あきらめ」でさえこうなのだから、「自由」や「人生」について哲学カフェで話しているうちに、いわゆる学問としての哲学と同じように、言語の限界に突き当たってしまうのは明らかだろう。

こんなふうにして、哲学書を読むときと同じように、哲学カフェにおいても、スペシャルワードというかたちで言語の限界が顔を覗かせ、僕たちを更なる謎に誘っているのだ。ワクワクするなあ。

僕は、かねてから、いわゆる哲学対話といわゆる哲学とは、ひとつに繋がっていると考えています。スペシャルワードという観点から、そのことが少しは示せたのではないかと思うのですが、どうでしょうか。